

枕冊子前田家本の本文について

——「校本枕冊子」附巻所収前田家本逸文を中心として——

田 中 重太郎

清少納言枕冊子が作品として一往完成したのは、一条天皇の長保三年（一〇〇一）であらうが、その写本として現存最古のものは、鎌倉時代（一一九二～一三三三）中期以前の書写にかかる前田家本であることは周知のとほりである。書写年時としては、藤原定家（一一六二～一二四一）筆の「臨時祭案調案」（浅野長武氏蔵。古典保存会第八期複製本として、昭和十八年七月二十八日刊）の中に「枕草紙」と題して書かれた十二三行（各行十六・七字乃至二十字）の断簡が現存書写年時のはっきりした、もっとも古い枕冊子本文であるが、資料として前田家本四冊の量にはとてもおよぶべくもない。

鎌倉期の枕冊子古写本としてその価値を高く買はれる前田家本の本文については、つとに池田亀鑑博士・楠（旧姓光明）道隆氏・藤田徳太郎氏・市村平氏・山脇毅博士・林和比古博士らによって紹介され、検討せられ、論じられたが、筆者もかつて「前田家本枕冊子新註」（昭和二十六年九月刊）の一書を上梓して、その本文内容を全文注釈し、

解説した。^ましかし、その書もいまは稀覯本に属して一般に読まれることが少なく、その後前田家本文について特に注を加へた論は、前記山脇・林両博士のもの以外に見かけないので、ここに観点をしぼって前田家本独自異文、あるいは、前田家本と堺本とにだけある異文の一部を抄出し、その本文の特色などについて考へてみようと思ふ。

いふまでもなく、清少納言枕冊子の本文は、

- 一 伝能因所持本系統
- 二 三卷本（安貞二年奥書本）系統
- 三 前田家本
- 四 堺本（宸翰本を含む）系統

の四系統にわけられてゐるが、一・二は正統派の本文として枕冊子二大系統本と呼ばれ、この作品の本質である随筆性を論ずるためにはつねにこのいづれかの系統本の本文がその対象になって来た。本文伝承の古さ、本文構成の雑纂性などのこともあり、江戸時代の春曙抄など旧注の時代から昭和四十四年にいたるまで、枕冊子本文の主流となつてゐるのは、この一・二である。

これに対して、三は、天下の孤本であって、「前田家本系統」と呼べる同類の本が今日まで一本も発見せられてゐないうへ、おそらく五冊で完本なのか、自伝的部分が一・二に比してすこし不足してゐるし、四は、その内容が「…は」「…もの」に限定せられてゐて、いはゆる作者の自伝的日記的部分はないものである。そして、この三・四はどちらもいはゆる類聚類纂本になってゐて、清少納言の枕冊子を随筆文学とみる先入観からは、不全欠陥の書であり、どちらも後人のさかしらによる編書と考へられて来てゐる。事実、三と四とをつぶさに読むとき、重複現象あるいは後人改修現象とおぼしきところが諸所にあり、語彙語法にも中世以降のほひがし、到底作者の原本に近いものとは考へ難い。かりに、逆にこれらが作者の原作に近いかたちであり、一と二とは、それに随感随想的部分や日記自伝的記事が追加せられたものと考へようとしても、それは、一と二とがより原形的で、二と三とは、一と二とから作者あるいは後人が——おそらく後人が——抽出加筆編輯したものと考へる説の自然さに抗すべくもないやうである。

わたくしは、三十年來枕冊子本文の成立を考へて来た。そして、二の三巻本が部分的な箇箇の語句語彙語法などにおいて、もっとも古態を存し、あるいは、くづれてゐない本文をもつてゐることを従来多くの例証をもつて説明して来た。

また、一の伝能因所持本系統は、古活字本、慶安刊本など本文のくづれてゐるものは別として、この系統の古写本においては、三巻本に近い、部分においては、三巻本以上の意義を有する本文であると説いて来た。^註

この考へは、いまでも變つてゐない。ただ、塚本本文を作者の自筆と考へられる本文からもっとも遠い、歪められた本文であるとし、前田家本が伝能因本と塚本とから抽出組成せられた後人の混成本文であると思ふあまりにその本文を感情的に嫌ひ過ぎた憂があると思ふので、ここで前田家本本文のうち、その独自異文——前田家本だけにある本文——あるいは、塚本とだけの共通本文のいくつかをあげて、これを読み、批判し、鑑賞もしてみたいと思ふ。

一般に若い時は、すべてに潔癖であり、純粹にものを考へやすい。清濁あはせ呑むなどといふことはなかなかあり得ない。学問の世界においてさへわたくし自身、三巻本本文の端正さに魅かれ、塚本・前田家本の不純を絶対にゆるし難いものにしたと反省してゐる。もちろん、これは、さうした主観的な態度や心がまへで学問を律することはできない。わたくしの三巻本善本説は小著「枕冊子研究」枕冊子本文の研究」をはじめ数冊の注釈書の中で何十回となく、できるだけ客観的なデータをあげてくりかへし立証し、解説したところである。一般に学問には、すくなくとも、実証を主とした、きびしい本文考証が必要だと思ふことは当然であらう。しかし、考へてみれば、前田家本が鎌倉時代の古写本であり、ひさしく世に読まれず、明治になってはじめてこの冊子の本文として学者の間に登場し、昭和になって強いフットライトを浴びた本であることは、実にたふとい事実であり、七百年以上手の加はつてゐない本であるところに、流布し、校訂せられて来た伝能因本・三巻本の本文とはまた別の、原始林に似た魅力のあることを感ぜずにはゐられない。もちろん、前田家本が七百年間手つかずの本文だとしても、

それが清少納言の原本に近いものなどは絶対にいへない。むしろその内容をつぶさに調査せられた楠氏の論文によれば、各冊の構成は明らかに後人の編修にかかることであり、筆者自身これを確かめたのである。^{注5}

ただ、それとは別にここには永く流布して来た伝能因本ではなく、また、三巻本にも見えない、前田家の本文で清少納言の枕冊子を読んでもみようといふのである。従来、高校用のテキストはもちろん、大学向きの教材においてさへ、よほど専門的な講義以外に前田家本文を底本として枕冊子が読まれることはなかった。前田家本を底本としたテキストは、わたくしの出した古典文庫刊の分冊本以外にはない。^{注6}古語辞典や大きな国語辞典の類にでも、いはゆる枕冊子の語彙として、三巻本文や能因本本文の語彙は採られても前田家本の語彙を収めてゐるものは少ない。それほど、人に読まれてゐない本文である。(前田家本・塚本の本文語彙は、小著「校本枕冊子」総索引第Ⅱ部に自立語はすべて採ってあるからそれが世に出れば、全貌がわかるわけである。)

以下掲げる本文はすべて小著「校本枕冊子」附卷(昭和三十二年十一月刊)所収「前田家本逸文」六一段の中からこれを探り、白文の原文に適当に漢字をあて、句読点・油点などをうってかりに校訂した。

注1 池田龜鑑博士「清少納言枕草子の異本に関する研究」(「国語と国文学」第五卷第一号昭和三年一月号)同「枕草子の形態に関する考察」(岩波講座「日本文学」所収昭和七年七月刊)同「美論としての枕草子—原典批評の一つの試みとして—」(「国語と国文学」第七卷第十号昭和五年十月号)

枕冊子前田家本の本文について

これらは、すべて最近刊行せられた「池田龜鑑選集」第五卷「隨筆文学—清少納言枕草子—」に収められてゐる。

楠(旧姓光明)道隆氏「枕草子異本研究—類纂形態本考証—」(「国語・国文」第四卷第六・七号昭和九年六・七月号)

藤田徳太郎氏「枕草子研究史の一面—原本整理の作業について—」(「国語と国文学」第十一卷第四号昭和九年四月号)

市村平氏「枕草子春曙抄本と前田本」(「国語解釈」第三卷第十号昭和十三年十月号)

山脇毅博士「枕草子本文整理札記」(昭和四十一年七月刊)林和比古博士「日本文学の争点」所収「枕草子の成立と伝本」(昭和四十三年十二月刊)同書解説(二)前田本枕冊子について

注2 小著「枕冊子研究」(昭和二十七年七月刊)「枕冊子本文の研究」(昭和三十三年十二月刊)所収の論文参照。

注3 注1参照。

注4 注2参照。

注5 注2参照。

注6 「枕草子」(宮崎晴美・早川甚三両氏編昭和五年二月刊)は、前田家本を底本としてゐる。

原則として、伝能因本の本文には見えず、三巻本の逸文として、「一本」「又一本」などと注記して引用せられてゐる本文にもないものだけを選んで章段順に抄してみる。

(A)六月廿余日ばかりに、いみじう暑かはしきに、蟬の声せちに鳴き出だしてひねもずに絶えず、いささか風のけしきもなきに、いと高き木どもの木暗き中より黄なる葉の一つづつやうやうひるがへり落ちたる見るこそあはれなれ。「一葉の庭に落つる時」とかいふなり。

三

(第二七段)「校本枕冊子」附卷四〇頁。以下頁数のみをしるす。これは、塚本逸文第三〇段に

(B)六月二十日ばかりのいみじう暑きに、蟬の声のみ絶えず鳴き出だして風のけしきもなきに、いとど木高き木どもの多かるが木暗く青き中より黄なる葉のやうやうひるがへり落ちたるこそすずろにはあはれなれ。秋の露思ひやられておなじ心に。(八二頁)

と見えてゐる本文であるが、「流布の伝能因本・三巻本にはまったくないものである。

この本文(A)あるいは、(B)そのものでなく、その源となるべきもの―がもともと清少納言の筆になって存在してゐたのか、後人が清女の筆をまねてかやうな擬枕冊子の文を作つたものかこれを判別することは困難である。(A)の「ひねもすに」「いささか風のけしきもなきに」「一つづつやうやうひるがへり落ちたる」(B)の「やうやうひるがへり落ちたる」「すずろにはあはれなれ」などといふ用法に在来の枕冊子を読んだ印象として似つかはしくないといふ感を抱き、これを総索引によつて能因本あるいは三巻本のそれぞれ現行本文ならびにその用法にあつたの考証をすれば、ある程度現行枕冊子の語彙・語法にはあはないといへるかもしれない。しかし、それとても、その祖本からくづれたかたちだと逃げれば―あへてこの語を用ゐる―、清少納言の文だといへるかもしれない。「ひねもす」「ひねもすに」は、枕冊子能因本・三巻本両系統本にないが、源氏物語には「ひねもすに」がある。

わたくしは、ここにひとつひとつの語彙・語法についてのあげつらひはしない。それは後日稿を改めて考へることとして、ともかくもい

ままで清少納言の枕冊子の本文としてあまり読まれてゐない本文を紹介する意味で稿をつづける。

なほ、(A)の「一葉の庭に落つる時」は、未詳。「一葉……」は「見ニ一葉落ニ而知ニ歳之將ニ暮」(淮南子・説山訓)、「一葉落知ニ天下秋」(文録)、「一葉落ニ梧桐ニ、年光半又空……」(白氏文集・新秋病起) などとあるが、ここには該当しないやうである。

(C)また、手やみもせず扇をつかひ暮らして夕涼み待ち出でたるがうれしければ、端近く臥して聞くに、月のいと明きに井近きところの水汲みたる音こそ涼しけれ。まして遣水などの近きはいふべきならず。

(第二九段 四一頁)

とある前田家本は、塚本にも「水汲みたる音こそ涼しけれ」が「水汲みたるこそいと涼しけれ」と異同があるだけでまったくおなじ文があるが、右の文の

井近きところの水汲みたる……

の「井」は、枕冊子の「井は」の段に固有名詞として出て来る、いくつかの「井」の概念とは異なつた感覚の語であるし、「水汲みたる……」「遣水」など伝能因本・三巻本両系統本には見えない語彙があつて、本文としてはまことに清新だが、それが清少納言のことばと考へられるかどうかきめがたい。もちろん、「井」の、このやうな用法は源氏物語にも見えないやうだが、「遣水」は、源語に十数例あり、当然王朝語であるからかるがるしく断じ難いこといふまでもない。

(D)七月十余日ばかりの日ざかりのいみじう暑きに起き臥し、いつしか夕涼みにもならなむと思ふほどにやうやう暮れ方になりて、ひぐら

しのはなやかに鳴き出でたる声聞きたるこそものより異にあはれにうれしけれ。

(前田家本第三一段 四二頁)

は、塚本には、

(四) 七月十日余日ばかりのいみじう暑きに起き臥し、いつしか夕涼みにもならなむと思ふほどに暮れ方になりてひぐらしのはなやかに鳴き出でたる声聞きつるこそものより異にあはれにうれしけれ。

(三四段 八四頁)

とあってほぼ同文であるが、「日ざかり」の語、「暑きに起き臥し」の用法など——この文の「起き臥し」は、暑いので起きたり臥したりして、つまりごろごろしてゐるの意と考へられるが、どうも王朝語法、すくなくとも清少納言の語法と考へられるものに抵抗を感ずると思ふのである。「起き臥し」が名詞であるか、起きてても寝ても、ねてもさめてもこの意の副詞的用法であるか以外に、起きたり臥したりの意の動詞としての用法も源氏物語・若菜下・権本にそれぞれ一例あるが、その用法とこことは異なるやうである。

(五) 霜月の一日ごろにみぞれたる雨うち降り、霰などまじりて、風のはげしう吹き乱りたる夕つ方、きりぎりす色の狩衣、紫の指貫、薄色の衣を上にて白き衣三つ四つばかり、紅か何ぞなどかさなりたる袖をひきあかめられたるかほにおしあてて、烏帽子の、やうにもなく吹きやられたる人の、「あな、むざん」といひて寄り来たるこそにくからね。

(前田家本三二一段)

は、塚本に

(六) 霜月の一日ごろにみぞれだちたる雨うち降り、霰などまじりて風の

枕冊子前田家本の本文について

はげしく吹き乱りたる夕つ方、きりぎりす色の狩衣、紫の指貫、薄色の衣を上にて白き衣三つ四つばかり、紅か何ぞなど重なりたる袖をいたく吹き赤められたるかほにおしあてて烏帽子の、やうにもなく、うしろざまに吹きやられたる人の「あな、寒」といひて寄り来たるこそにくからね。

(三二五段)

とよく似た本文がある。

「寒」といふ名詞は、伝能因本・三卷本両系統本にあるが、「みぞる」といふう行下二段活用動詞は、その動詞がさきにあつて、その連用形が名詞になったと考へるべきかもしれないが、すくなくとも、この冊子に用例はない。「ひきあかめ」は、「ふきあかめ」の誤かと思はれる。「あな、むざん」の「むざん」は「無残」「無惨」「無慚」「無慙」などの用字をもつ漢語(仏語)であり、源氏物語・手習に「むざんの法師」といふ用例があるが、塚本に「あなさむ」とあるのといづれがより古いかたちかきはめ難く、枕冊子の流布本(伝能因本・三卷本)には見えない語である。

(七) 賀茂の一の橋こそをかしけれ。まして臨時の祭の夜いたう更けて、水の音に笛の音のあひて聞えたるに、立燈の煙のあひたるは、めでたくそぞろ寒くおほゆることかぎりなし。火の影に搔練の艶、半臂の緒などのつやつやと見えわたるこそ優なれ。年ごとに行きて見まほしけれど、さもえあるまじ。命のほどもいとくちをし。

(前田家本三四段)

とあるのが、塚本にはほぼ同文であり、「いたう」「立燈」「めでたく」「そぞろ」「見えわたる」「えあるまじ」「くちをし」がそれぞれ「いたく」「た

ちあかしの火の「めでたう」「すずろ」「見えたる」「えあるまじき」など
とある程度の相違である。「立燈」は、紫式部日記などの本文に見える
王朝語彙であるが、枕冊子の流布の諸本や源氏物語には絶えて見ない
ものである。

(I)また、忌違へなどして晝に帰るに、忍びたる男のさるべきところよ
り帰るけしきのしるく闇にも顔をふたぎてつきづきしげにかてうげ
に思ひたれど、ありつかず、袴広に見えて、せめて車の近く来れば、
まだあけぬ家の門に立ちどまりて過ごしたるこそむげに知らぬ人な
らめど車にも乗せつべき心ちすれ。また、車の簾あげて、有明の月
のいと明かきに、「残りの月に行く」と声をかしく誦じつつ行くこ
そをかしかれ。

(前田家本三七段 四七頁)

とある本文が、塚本では、「かてうげに」「袴広に」「いと明かきに」「残り
の月に行く」「をかしく」「誦じ」がそれぞれ「かむてうげに」「はかまひ
るかに」「あかきに」「のこりの月に行く」「をかしくて」「すうし(すこし)」「
などの異文だけでやはり本文として存在する。「かてうげに」「かむてう
げに」については、かつて小考を発表したが、おちくば(物語)う
つほ物語などこの時代の作品に似た用例の見えることばであるが、通
行の枕冊子本文や源氏物語などには見かけない語彙である。「残りの月
に行く」は、賈島の「佳人尽飾_リ於_ニ農粧_ニ」魏宮鐘動_キ遊子猶行_キ残月_ニ函
谷鷄鳴_ル(和漢朗詠集晝賦)を引いたもので、伝能因本・三卷本の「大
納言殿まゐりたまひて」他一箇所に引かれてゐる。

注1 「枕冊子」「かてうげに」「かむてうげに」考」へ(「平安文学研究」第七輯
昭和二十六年十一月刊小著「枕冊子本文の研究」にも修補して収めた。)

原田芳起氏著「平安時代文学語彙の研究」(昭和三十七年九月刊)所収
「宇津保物語の中の漢語」の六「かてう」考」があって、前掲小論
に触れてゐられる。

(J)つごもりの夜は内裏に猶つねよりもをかしき燈台ども間もなく立て
並べ點したる火のさまなどのただのところにやは似たる。南殿に出
でさせたまひて、いみじう明き火の影に宣命読ませて聴き立てる鬼
のさまなどぞおそろしけれどゆかしき。内侍の帷上げてつかうまつ
るもその夜はいとさまことなり。帰らせたまふ殿上人の足もいとお
どろおどろし。

(前田家本三八段 四八頁)

は、前田家本の独自異文であつて、伝能因本・三卷本両系統本はもち
ろん、塚本系統の本文にも見えないものである。つまり、枕冊子現存
諸本のうち、この「つごもりの夜は……」ではじまるこの文章は、前田
家本にしかない本文である。この段に描かれてゐる「鬼やらひ」「追儼」
の儀は、中国にはじまり、わが国では文徳天皇時代以来、毎年大晦日
に宮中・杜寺などで行なはれた年中行事で、貴族はもちろんのこと、
悪鬼を追ひ払ふ、この儀式は後に、民間でも節分の夜、豆を撒いて災
鬼を追ふ儀式になつたのである。これは、「おにやらひ」といふ名で類
聚名儀抄・運歩色葉抄に出てゐるし、うつほ物語、菊の宴に「つごも
りの夜ついなはいとく果てぬれば……(大日本国語辞典の引用による
が、本文を調べたところ見あたらない。明解古語辞典によれば、これ
は紫式部日記の文のやうである。)とあるが、このやうな描写的な記事
ではないが「儼」をやらふことは後掲のやうに源氏物語の紅葉賀と幻
との二箇所にも出て来る。また、源氏物語には「おに(鬼)」といふ語

が十九回出て来るし、他に「南殿の鬼の、なにがしの大官をおびやか
しけるたとひを思し出でて…」といふ例が、例のゆふがほの巻で、ゆ
ふがほが荒廢した「なにがしの院」で夜半ものにおそはれ急死する場
面にあるが、この「南殿の鬼」は源氏物語の河海抄の注に大鏡上巻太
政大臣忠平（貞信公）の伝に世継のことばとして、

この殿、いづれの御時とはおぼえ侍らず、思ふに、延喜朱雀院の
御ほどにこそは侍りけめ、宣旨うけたまはらせたまひて、行ひに
陣の座さまにおはします道に、南殿の御帳のうしろのほど通らせ
たまふに、ものけはひして御劔のいしづきをとらへたりければ、
いとあやしくてさぐらせたまふに、毛はむくむくと生ひたる手の
爪長く、刀の刃のやうなるに、鬼なりけりといとおそろしくおぼ
しめしけれど、臆したるさま見えじと念せさせたまひて、「おほや
けの勅宣うけたまはりてさだめにまるぬ人捕ふるは、なにもものぞ。
ゆるさずはあしかりなむ」とて、御太刀を引き抜きて、これが手
を捕へさせたまへりければ、まどひてうち放ちて、丑寅の隅さま
へまかりにけり。…

とあるのをいふのであらう。大鏡は、平安末期の作品であるが、右の伝
承は、醍醐朱雀朝のころ、すくなくとも、貞信公藤原忠平（八八〇—
九四九）のときのことになるからうつは、枕・源氏の世界に先行する。
ただし、(j)の記事は、このことには無関係のやうである。

丑寅の隅を鬼門といふ。このことばは、陰陽道をつかさどる家が名
づけたのかもしれないが、鬼が出入りするところとして何事にも忌み
避けてゐた。この風習は、いまに根強く残つてゐるが、平家物語巻二・

座主流の条に

この日城の叡岳も帝都の鬼門に峙つて、護国の靈地なり。
とあるのが古い用例であらう。「丑寅」を動物の「牛・虎」とし、おそ
ろしいものとし、さらに角を生やし、虎のやうなかは・かたちにして
「鬼」が誕生したのであらうが、もともと「おに（鬼）」といふ日本語
にはそのやうなかたちはなかったと思ふ。

それはさておき、源氏物語に見える十九例の鬼は、「源氏物語事典」
によれば、「人死して鬼になるとか、羅刹・夜叉の類。あるいは、目に
見えぬおそろしきもの、かたちのおそろしいもの、また、伊勢物語段
の「鬼一口にくひてけり。」と同義の例もあり、「『神』『狐』『こだま』とほ
ぼ同類のごとくにも考えられていたやうで、通覧して、一義的にその
属性をさだめがたい。」（「鬼」の項目石田穰二氏担当。かなづかひこの部分
は、原書による。）とせられる。

清少納言の枕冊子には、粥杖の話、蓑虫の話、蟻通しの明神の段に
見える棄老伝説、盂蘭盆の話その他いくつかの民話民俗史料があつて、
浩瀚な源氏物語にまったく見えない分野があつて、おなじ風土、おな
じ時代、おなじやうな環境に生まれ、育った才媛でありながらそれぞれ
れ異なった貴重な文化財を遺したが、この前田家本文がどの程度清少
納言の原本にさかのぼれるか、あるいは、後人のまったくの捏造本文
であるかは別として、興味深い本文であることにはまちがひはない。

つきに、これは前田家本の独自異文でなく、塚本系統の諸本にも同
様の本文があるが、左のやうな追儼の描写感想の一段がある。

(k)人の婿とその御てとは、儼やはらぬ、よし。若き人人の身を投げて

われ高く鳴らさむとやらひまどふを、几帳の前にそひ臥して見やり、うち笑ひなどしたるこそをかしけれ。大うへなどもたたきこぼめかしたまはむは、すこし輕輕なるべけれど、なかなかそれはあへなむ。わざとさま悪しからむこそ見苦しからめ、ゐながらなになどして見えむものをうちたたきたまはむは、なでふことかあらむ。大殿はたよそほしくとも、ほこりに立ち走りやらひたまはむ、悪しからじ。婿の君はしもすべてやらふまじ。そも親の御家、殿上などにて人よりけにやらふべし。ただそのかしづきすゑたるところにてのことなり。むすめも中の君はただやらひ、法師のやらひたるはいと見ぐるし。思へば、あやしうしはじめたる事なりかし。ただなるをりはちごとも（底本「ちとも」の走る）（底本「ゝしる」）をも制し、もの鳴るをも「むつかし。かしがまし」と制す。ゆもて（田中いふ、「ゆすりて」ノ誤カ）たたきそめけむは何ぞとよ。つごもりの夜はあやしきところだに例よりはをかしきをましてよきところ内わたりなどはをかしきぞことわりなるかし。（三九段 四八〜四九頁）

これを読むと、貴族の家の若い夫婦は、追儼をしてへんな格好をしないのがよく、婿は、自分の生家あるいは、宮中では人に負けずにやらふのがよく、むすめは「中の君」すなわち次女はさしつかへないといひ、「あやしきところ」つまり身分の低い家でさへこの儀式をするとしるされてゐる。一読して、なんだか平安末期乃至中世的なほひを感ずるのは、わたくしだけであらうか。

かるがるしい印象批評は厳につつしむべきであるが、(J)も(B)も枕冊子流布本（伝能因本・三巻本）には全然見えない本文だけにあらたま

った気持で読め、清少納言の世界の認識を広めさせられるが、それと同時にその行文、その内容に彼女の筆でなく、これを擬した何人かの加筆でないかとの杞憂をおぼえずにはゐられないのである。

そして、これらは源氏物語・紅葉賀に見える

いつしか雛をしすゑて、そそきるたまへる、三尺の御厨子ひとりひに品品しつらひすゑて、また小さき屋ども作り集めてたてまつりたまへるを、ところ狭きまで遊びひろげたまへり。「雛やらふとて、犬君がこれをこぼち侍りにければつくろひ侍るぞ」とて、いと大事とおぼいたり。

と、幻の巻にある

年暮れぬとおぼすも心ぼそきに、若宮の「雛やらはむに。音高かるべき事、なにわざをさせむ」と走りありきたまふも、をかしき御ありさまを見ざらむことよろづにしのびがたし。

とある二つの例がある。「追儼」の記事が禁中のそれではなく貴族の家でこのことであることを思ひ出させる。「源氏物語事典」「な」（雛）の条（石田穰二氏担当）の解説によれば、

『公事根源新釈』には「追儼の儼は難なり。大寒の陰陽災難をなし、厲鬼これによりて人をなやますによりて、この難鬼を追ひ払ふなり。」とある。十二月晦日の夜、禁中で悪鬼を駆逐する儀式である。大舎人の身長大なる者馬一人を撰んで方相氏といい、黄金四目の飯面をかぶり黒衣朱裳を着、右手に戌を執り、左に楯を持ち、仮子二十人を従えて、鬼を逐い、親王以下、桃弓、葦矢、桃林を持ってこれに従い、宮城の四門（陽明、朱雀、殷富、達智）を出

る。振子^{わらわ}は『延喜式』以後は八人と見える。のちには方相氏を鬼に見立ててこれを追い、あるいは殿上人、桃の弓、葦の矢をもってこれを射るようになった。こうした変化の時期は明らかでないが、弘仁の『内裏式』には「方相先作^レ儼声^一、即以^レ戈擊^レ楯、如^レ此三遍、群臣相承和呼、以逐^二惡鬼^一、各出^三四門^一」^{方相出^二北門^一、至^三宮城門外^一、京職接引、鼓譟逐、至^二郭外^一而止。」と見えるから旧態を存し、『西宮記』も「方相揚^レ声打楯^三度^一」^{群臣相承和呼^二}とあって異状を認めないが、『北山抄』『江家次第』は「群臣相承、和呼追^レ之^一」とし、『建武年中行事』は「大とねりれう鬼をつとむ。陰陽寮の祭文もちて南殿のへんにつきてよむ。上卿以下これを追、殿上人ども御殿の方に立て桃の弓にている。仙花門より入て東庭をへて滝口の戸にいづ。こよひ、所々にともし火をおほくともす。東庭、あさがれひ、だいばん所のまへのみぎりに燈台をひまなく立てともすなり。」とあり、『公事根源』の説明もこれによったとおぼしい。…}

(三五七頁)

とあるが、わたくしは有職故実に暗く、その方面の知識のない者であるが、前掲前田家本独自の本文は、『建武年中行事』や『公事根源』の解説によく似てゐる。といふことは、清少納言は女房であったから外のことを見なかったかもしれないが、この追儼の行事は、やや下った世のその描写のやうである。

榮花物語卷一月の宴に、

はかなく年も暮れぬれば、今のうへ、童^{わらわ}におはしませば、つごもりの追儼^{ついな}に殿上人^{ふらづつみ}振鼓^{ふらづつみ}などしてまゐらせれば、うへ(帝)振り

枕冊子前田家本の本文について

興せさせたまふもをかし。

とあり、卷第三さまざまのよろこびに、

つごもりになりぬれば、追儼とのしる。うへ(帝)いと若うおはしませば、振鼓^{ふらづつみ}などしてまゐらするに、君だちもをかしう思ふ。など見えるのは、宮中の追儼の記事であるが、(丁)ほど具体的に精細ではない。

前田家本逸文の本文はまだこのあと二十一段もあるが、それらの紹介批判は稿を改めるとして、ここに示した、いくつかの例文から鎌倉時代から七百年学者文人に手を加へられてゐない前田家本の本文を比較的に語句を分解抽出したり、現存枕冊子各系統本の本文に校合比較したり、語彙考証することなしにその古さ、その信憑性などを考へてみたのであるが、正直にいつてわたくしの考へでは、従来説いて来たやうに前田家本も塚本と同様、枕冊子の通行本文を粉本として、その注釈、補修した本文だとの感を拭ひ得ない。

まことに歯切れの悪い、随想的な論になつてしまつたが、枕冊子前田家本文の一部を読んでおぼえ書をしてみた次第である。

なほ、村井順博士は、『淑徳国文』第九号(昭和四十四年九月刊)所載『成田図書館本「住吉物語」について』の論文、形容詞「うしろめたなし」は平安朝物語全盛時代の日常語・流行語で、「うしろめたし」は雅語・歌ことばではあるまいかといはれ、「うしろめたなし」が枕冊子諸本中、三卷本第一類本に一例と前田家本に三例見えるが、後者について「やはり現存最古の写本で原『枕草子』の形をとどめているからだと思う。」(同誌九一〇頁。かなづかひ原文のまま)と述べてをられるが、これはわたくしとしては、なほ考ふべきことと思ふ。